



市民活動の新たな挑戦

いろいろな悩みや不安、難題を抱える人たちを支え、問題解決に積極的に取り組む市民活動は各地ですそ野を広げている。ファイザー製薬ではヘルスケアの分野の市民活動を支援し、その社会的認知を高めることを目的に、2000年から助成プログラムをスタートさせた。過去の実績にとらわれず、活動のユニークさと将来性に評価の重点を置いているのが特徴。2001年度の助成対象となった各プロジェクト(左頁参照)を中心に、9回連続(今回は6回目)でリポートする。



簡易宿泊所(ドヤ)には退後の人や寝たきりの人もいて、寿の住民やボランティアが一緒になって支援している(写真左)。街の人たちが集まってくる「さなぎの家」



救急車に同乗することで、孤独感、不安感を少しでも和らげることがめざした

特定非営利活動法人さなぎ達

横浜寿町「さなぎの家」なんでもSOS班(神奈川県)

簡易宿泊所が密集するドヤの街、横浜・寿地区。さまざまな事情によって仕事や家庭を失い、路上生活やドヤ生活を余儀なくされている人たちが集まる。同地区で生活する人たちの支援活動を行っている「さなぎ達」企画実行室長の岡野明子さんは、

「長引く不況や高齢化で、ちょっとしたきつかけで路上生活を強いられるケースも少なくありません。障害をもつ人も多く、心身ともに疲れた『絶望』と隣り合わせの人たちはばかりです」と、現状の厳しさを語る。

さなぎ達は、そうした街の人たちが安心できる「自立自援」の土壌づくりをめざして、18年にわたり路上生活者の支援を続けてきた「木曜パトロールの会」のメンバーやさまざまな支援者が集まり設立された。

昨年10月には、簡易宿泊所の一部を借り上げて「さなぎの家」を開設。街で生活する人たちの心を癒す交流の場として、毎朝9時から夕方5時まで開放している。集まって話をしたり、お茶を飲んだり、一日に30人くらいが入りする。

ここでは、誰もが気兼ねなく振る舞える。毎週日曜日には「カレーの日」として街の人たちが作ったカレーが出され、訪れる仲間との新しい出会いを試みている。

11月には、「なんでもSOS班」という新しい支援プロジェクトを立ち上げた。急な病気などで救急車で運ばれる人たちと同乗することによって時間を共有し、不安感を少しでも和らげることができたらとの思いからだ。



「街に住む人たちがお互いを支援するシステムづくりをめざしたい」と語る岡野さん

の彼らにとって、支えてくれる仲間がいるということと安心するんですね。たとえ搬送されても、付き添いがあるなしで病院の対応も違いますし、見舞いに行つて話をするだけですぐ元気になつて帰ってきます。近ごろは本当に緊急を要するものだけになり、救急車が来てもしさなぎの家で預かってしまつようになりまして」

寿地区の生活者の中には、心の障害やさまざまな障害を持つ人たちが多くいる。こういった人の健康を考え、SOS班では、ソーシャルワーカーや福祉事務所のケースワーカーなどの連携も視野に入れている。

クラシック・バレエのレッスンで障害者の心身の活性を導く

特定非営利活動法人ボーロウニア協会

障害児・者に対するダンスワークショップ(東京都)